Kobe University Repository : Kernel

PDF issue: 2025-07-07

近代社会の儀礼構造

今井，信雄

(Degree)
博士（学術）
(Date of Degree)
2001-03-31
(Resource Type)
doctoral thesis
(Report Number)
甲2425
(URL)
https://hdl.handle.net/20.500.14094/D1002425

※ 当コンテンツは神戸大学の学術成果です。無断複製・不正使用等を禁じます。著作権法で認められている範囲内で、適切にご利用ください。

【２０１】

氏　名・（本　籍）　今井　信雄（大阪府）

博士の専攻分野の名称　　博　士　（学術）

学　位　記　番　号　　博い第３７４号

学位授与の　要　件　　学位規則第４条第１項該当

学位授与の　日　付　　平成１３年３月３１日

【学位論文題目】

近代社会の儀礼構造

審　査　委　員

主査　教授　岩崎　信彦

教授　油井　清光　　助教授　藤井　勝

おそらく宗教はあらゆる文化の源である。そして、現代社会においても、あらゆる領域で「宗教のような」構造はみいだされている。それどころか、平成７年の「オウム真理教」をめぐる一連の事件以降、いっそう顕著になった既成の「宗教教団」への一般的に否定的な態度に反して、社会全体に「宗教的なるもの」の構造を積極的に取り込もうとする動きはますます増加している。「宗教的なるもの」を取り込む目的のひとつに、「普遍性」がある。社会全体は普遍性を存在せしめようとし、かつて宗教でみられた仕掛け（＝儀礼構造）を自らのうちに取り込もうとする。

本論文は、近代社会を成り立たせる儀礼構造が、社会構造や制度、資本主義や消費社会などといかに関わっているのかを考察したものである。第１部ではトータルな儀礼構造を成りたたせる島嶼社会での事例考察を、第２部では局地的な儀礼構造を成り立たせる現代社会の多様な事例考察を行った。

まず、第１部では長崎県の祭りである「オクンチ」を題材に、社会構造・制度の変化がゆるやかでるため、それら諸制度が儀礼構造と有機的に結びつくことで全体的な世界観・宗教観を持ちうることとなった様相を示している。まず当地の祭りは通過儀礼的な要素を持っていおり、島内の厄年の男は祭りに参加することで一人前と認められる。また、祭りを担う島内の集団には、それぞれ役割分担があり、特に青年団の内部でも年齢に応じた役割が決められている。つまり、島の男は青年団に所属し、祭りの中の役割を次々と担っていくことでライフステージを進めていくことになる。また、祭りでは島内のすべての人が何らかの役割を担うことになるのであるが、これら祭りの構造は空間的配置によって、島の人々の世界観を示すものとなっていることが確認された。いわば、社会と儀礼とが相互に有機的に関連しあうことで、ひとつの相対的にではあるが世界観を形成している場合である。

以上のような全体的な儀礼構造に対し、第２部では局地化された儀礼構造のありようを明らかにしている。まず、第２部第１章の「地域アイデンティティと儀礼構造」では、伝統や文化が他者との比較に基づいて省察され、自らの存在を確認するために存在する構造を指摘している。それはたとえば、第１節では第１部でみた「おくんち」における「長刀使い」という役割と、江島の隣島である蠣浦島における「獅子舞」という役割の、まったく異なった位置づけとしてあらわれる。「長刀」が島外で行われることがまれであるのに対し、「獅子舞」はその活躍の場を島内外に広く求めているのである。その「獅子舞」に焦点をあて、伝統の生成・文化の変化という観点から論じたのが第２節「炭坑と地域アイデンティティ」である。

長崎県の蠣浦島は、炭坑で栄えた島である。1968（昭和 43）年の閉山によって島自体は衰退したが、炭坑労働者によって島外から持ち込まれた「獅子舞」は、いまや島の伝統芸能として認識されている。炭坑閉山後、島には３つの「獅子舞」グループがつくられた。そして、３つの獅子舞グループが島内外で自分たちの獅子舞を披露することによって、結果的にかつての炭坑労働者たちの「獅子舞」は島の現在の「伝統」としての位置を獲得していった。このとき、「獅子舞」は、行政にとってはかつての「繁栄」であり、元炭坑労働者たちにとっては過ぎ去った「人生」であり、獅子舞グループの人たちにとっては島の「個性」であった。蠣浦島の獅子舞はこれら３つの意味を担った「伝統」であったと思われるのだ。

第３節「ノスタルジアと近代観光」では、「文化」が現代人のアイデンティティの問題として論じられる。それはツーリズムのなかで文化が醸成されていくこととパラレルな問題でもある。近代人はそのアイデンティティの脆弱性のため「真正性」を求めようとする。真正性は「本当らしさ」と言い換えてもよい。真正性を求める行為は、例えば近代観光の中にノスタルジアのまなざしを向け、その地で披露されている「伝統」や「文化」を真正なものとみることとして現れる。近代観光における「文化」や「伝統」がしばしば「懐かしい」という言葉で意味づけられるように、ノスタルジアのまなざしは近代観光を真正なものとして構成する役割を担っている。けれども、ノスタルジアは「本当はこうであった」というレトリック、言い換えれば原因と結果を反転させるレトリックによって成り立つものであると言えよう。

第２部第２章では、空間を分節化し、何らかのリアリティをもたらすような構造を、現代社会の事例の中にみている。たとえば、第１節「展示されるリアリティ」では、博物館を成り立たせるような儀礼構造について論じている。そして博覧会やイベントなど他者に向けて「展示される」ことの機制を明らかにした。そのうえで、現代のメディア社会のなかでまるで展示品のように提示されることにこそリアリティが基礎付けられる状況を指摘した。

コトバのリアリティは、音声によるコミュニケーションと文字によるコミュニケーションのふたつの形式からなっている。例えば、前者はきまり文句を、後者はストーリー化を促す。このふたつの形式が混合した形でコトバのリアリティは構成されている。そして、このコトバがモノとセットになることでパッケージとしての形式を成り立たせることになる。展示品（モノ）と説明書き（コトバ）のパッケージは博物館に典型的にみられるが、フーコーが明らかにしたように、このふたつの結びつきは実は保証されていいない。にもかかわらず、メディアのなかで映像（モノ）と音声（コトバ）の連鎖のなかで、われわれはパッケージのなかにますますリアリティを見いだすようになっている。われわれは博物館も、メディアも、それが再構成されたことを知る必要があるのだ。

そして、負の記憶としての「災害」もまた博物館の中で「展示」されていく。第２節「災害と観光のはざま」では、阪神・淡路大震災の「爪痕」でもある野島断層を展示している施設を事例として、現代社会を考察している。このとき、「記憶」は、記憶自体が「保存される」ためにあるということになるが、このことは現代社会の「儀礼構造」が決定的にかつての「儀礼」とは異なっていることを明らかにしている。

第２部第３章の「記憶をめぐる儀礼構造」は、阪神・淡路大震災の「モニュメント」がどのように形成されていったのかを捉えようとしたものである。まず、第１節ではその「動機」の側面から、第２節では「社会のあり方」の側面から考察した。それらによって明らかになったことは、次のことである。

阪神・淡路大震災以後，被災地には「震災を記念するモニュメント」が数多く建てられている．記念行為が「ひとつの世界」との結びつきを再確認したいという要求をあらわすものであるならば，それぞれのモニュメントも何らかの「ひとつの世界」を想定していると考えられる．それぞれのモニュメントの指向を分析してみると，実際は設立主体の組織としての性格に大きく影響されるものであった．設立主体の違いが，モニュメントの性格を決定づけていたのだ．震災のモニュメントは，設立主体が組織として担っている「職務」

の範囲内にあるかにみえた．けれども，組織を越えて，ふたつのリアリティがモニュメントとしてあらわれていた．まず，身近な人の死を追悼するモニュメントの型式があった．言葉は少なく，ただ死を死としてのみ受け取る心性のあらわれであった．次に，「わたしたち」という言葉が数多くみられたモニュメントがあった．「わたしたち」という言葉は，均質な空間を前提にしたリアリティのあらわれとして考えられるであろう．どちらも，組織を越えてモニュメントを特徴づける型式として存在していたのだが，ふたつのリアリティが重なるモニュメントはみられなかった．ふたつのリアリティはまったく異なる機制によって成り立っていることが明らかになったのである．

第３章で明らかになったのは、かつて宗教がもたらした「リアリティ」が、ネーションの成立と共に変容してきたということである。生と死という我々の根本的な命題に対して「宗教」は有効なものではなくなったけれども、宗教を成り立たせる「儀礼構造」はいまなお有効に拡散し存在している。

第１部でみたことと同じく、第２部でもまたわれわれは儀礼構造と共に生きていることが明らかになった。けれども、その形態はまったく異なっている。むしろ、われわれにとって必要なことは「宗教」そのものではなく、宗教を成り立たせている「儀礼」に依拠してわれわれが存在していることを知ることである。一方でトータルな儀礼構造を拒否しながら（「宗教」に対する警戒感）、拡散する局地化された儀礼にさらされている。そうでなければ、現在、社会問題として顕在化している多くのことがら（「宗教に対する無防備」も、「アイデンティティ・クライシス」も、「時代の閉塞状況」、などあらゆる問題）は、さらにまた多くの問題を引き起こしてしまうかも知れないだろう。

（別紙１）

論文審査の結果の要旨

氏　名	今井 信雄
論文題目	近代社会の儀礼構造

要　旨

本論文は、社会の存立における宗教的なものの意義という、社会学固有の問題を解明するために、九州の島嶼と震災後の兵庫県において「儀礼」に関わる事象の調査を行い、そこにおける構造を考察したものである。

まず、第１部では長崎県江島の祭りである「オクンチ」を題材に、厄年の男が祭りの主役となる通過儀礼的な祭祀がとらえられる。そこには山と海の両極に神の位置を与える二元的構造とそれを媒介する儀礼の空間構造があり、江島において社会と儀礼とが相互に有機的に関連しあい、ひとつの統合的な世界観を形成していることが解明される。

第２部では、このような儀礼が、局地化され世俗化されながら拡散していくありさまがとらえられる。まず、炭坑で栄えた蠣浦島では、炭坑労働者によって島外から持ち込まれた「獅子舞」が、その活躍の場を島内外に広く求め、他者との接触によって、島の「伝統」「個性」としての位置を獲得していく過程が分析される。

この過程は、さらに「ノスタルジアと近代観光」という枠組でとらえなおされる。近代人はそのアイデンティティの脆弱性を補うために「真正性（本当らしさ）」を求めようとするが、その一つが近代観光（ツーリズム）の中におけるノスタルジアへのまなざしであるとする。また、「展示されるリアリティ」では、博覧会やイベントなどにおいて他者に向けて「展示される」ことの機制が明らかにされる。そして、負の記憶としての「災害」もまた博物館の中で「展示」されていくことが、野島断層を展示している施設を事例として考察されている。

最終章の「記憶をめぐる儀礼構造」は、阪神・淡路大震災の「モニュメント」がどのように形成され、どのような意味を担っているかをとらえている。設立主体の違いを越えて、ふたつのリアリティがあらわれる。まず、身近な人の死を追悼するモニュメントの型式であり、言葉は少なく、ただ死を死としてのみ受け取る心性のあらわれである。次に、「わたしたち」という言葉が数多くみられたモニュメントの型式であり、そこに均質な空間を前提にしたリアリティのあらわれが認められる。しかし、ふたつのリアリティが重なるモニュメントはみられず、これらがまったく異なる機制によって成り立っていることを示している。

かつて宗教がもたらした生と死のリアリティは、近代ネーションの成立とともに、均質な空間のなかでとらえられる儀礼構造としていまなお有効に存在しているという結論に至る。

以上のように、本論文は、伝統的な祭りから今日的な震災モニュメントにいたる諸儀礼の構造を解明し、社会のなりたちと宗教的なものの交錯を明らかにするという問題意識豊かな考察である。今後、さらなる実証と理論の深化が課題であるが、そのための地歩をしっかりと築いた研究となっている。

以上の評価にもとづき、本審査委員会は、論文提出者今井信雄が博士（学術）の学位を授与されるに足る資格を有するものと判定した。

主査記載氏名・印	岩崎 信彦

審査委員

区　分	職　名	氏　名
主　査	教授	岩崎 信彦
副　査	教授	油井 清光
副　査	助教授	藤井 勝